がっ釣り兼好さん

私もがっ釣りしていた…かも？

鎌倉の海に鰹といふ魚は、かの境にはさうなきものにて、この比もてなすものなり。それも、鎌倉の年寄の申し侍りしは、「この魚、おのれら若かりし世までは、はかばかしき人の前へ出づる事侍らざりき。頭は、下部も食はず、切りて捨て侍りしものなり」と申しき。
かやうの物も、世の末になれば、上ざままでも入りたつわざにこそ侍れ。

（『徒然草』Web版新編日本古典文学全集 43）［吉田兼好著］、 永積安明校注・訳より）

令和６年12月14 日（土）の横浜市立大学学術情報センター市民講座では、「兼好法師の足跡を『兼好法師集』から探る」と題して、兼好法師の歌集について取り上げます。

兼好法師といえば有名な**『徒然草』**！
この第百十九段で鎌倉の鰹について記しています。本展示では、兼好法師が語る当時のお魚事情や魚介にまつわる一節を、当センターで所蔵している魚（海の生き物）や漁法等に関する江戸・明治期の貴重な資料とあわせてご紹介します。

横浜市立大学学術情報センター
令和６年10月31日～12月26日